

2009年9月20日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：ローマ人への手紙

説教題：信仰によって

はじめに

この八月から、北海道聖書学院の夜間聖書講座で毎週金曜日の夜に「ローマ人への手紙」の授業を担当させていただいております。そこには18名の方が参加しております。私自身、ローマ人への手紙から様々なことを教えられてきています。改めて福音のすばらしさに目が開かれました。

実は正直に申し上げますと、私はずっとパウロの手紙に対して苦手意識があつて、教会で語ることはできるだけ避けてきました。しかし今回、外に向けて語るだけでなく、この教会においてもローマ人への手紙から御言葉を語るべきではないか迫られております。

そこで、きょうからしばらくローマ書をもに開いていく予定です。

1 割礼を受けるべきか否か

ローマ人への手紙というのは、題名が示すとおりにパウロが、およそ二千年前のことですが、ローマに住むクリスチャンたちに向けて書かれた手紙です。イタリアのローマにも当時すでにイエスを主と信じる人たちが起こされていきました。当時、すべての道はローマに通ずと言われるほどローマは世界の中心地となっていたので、そこには様々な外国人が集ってきます。そこでクリスチャンとなるケースが増えていく。当然、ユダヤ人たちもその中に含まれていました。

そのユダヤ人ですが、クリスチャンとなった後も古い習慣を大切にしていました。具体

的に言えば、男の子が生まれると、割礼を受けさせる。のは当然のことだと考えている。なぜなら、創世記に書かれているようにアブラハムは後の子孫に至るまで、契約のしるしとして割礼を受けさせなさいと言われていたのではないかと。それが根拠です。

問題は、ではユダヤ人でない異邦人はどうするかです。やっぱり異邦人であっても神を信じたなら、ユダヤ人と同じように割礼を受けさせるべきではないか。いやそんなことは関係ない。ユダヤ人と異邦人との間でそんな意見の対立があり、大きな問題となりました。

一見すると私たちにあまりなじみのない問題のように見えますが、実はこの問題をとおして、救いとは何かははっきりとしてまいります。

2 アブラハムの場合（創世記 15 章 1～6 節）

(1) 跡継ぎが生まれぬ苦しみ

パウロは、アブラハムに焦点を当てます。アブラハムのご存じだと思います。彼はある時、神の御声に従い、当時カナンと呼ばれていた、今のイスラエルの地に導かれていきます。アブラハムが長い旅を終えて、カナンの地に入ったとき、神は語ります。「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。」そのことばにしたがって、彼はカナンの地で生活することになるわけです。

その後、年月が経過するうちに、徐々にある問題が表面化してきました。アブラハムもサラも高齢なのに跡継ぎが生まれぬ。一昔前までは日本でも跡継ぎのことは大きな問

題でした。ときどき時代劇などを見ていると、お世継ぎが生まれないとお家取りつぶしになる、それを避けるために家臣が一生懸命奔走する場面が出てきます。

アブラハムの時代もそれと非常に似たような習慣がありました。世継ぎが生まれないということは一族にとって大変な問題になる。ある晩、アブラハムは天幕の中でそのことを考えて眠れなくなります。頭の中はいろんなことがわき上がってきます。そして渦巻きに巻き込まれるようにして、ぐるぐると深い穴の中に吸い込まれ、苦しくなっていく。今のことば言えば、アブラハムはうつ的な状態になってしまう。

(2) 「さあ、天を見上げなさい」

悩みが深くなっていきますと、次第に視線は下の方を向いてしまいます。どうしようどうしようと頭を抱えて悲観的なことばかりを考えてしまう。そのうちに自分を責める思いも出てくる。どうすることもできなくて、途方に暮れることがあります。

神はそんなアブラハムにどうなされたか。非常に具体的です。彼を天幕の外に連れ出す。言い換えれば、環境を変える。場所を変える。転地療法と言ってもいいかもしれない。そして神はこう語ります。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」「あなたの子孫はこのようになる。」

神は具体的な目に見えるものとおして、気落ちしているアブラハムを励ますのです。

「星を数えることができるなら、それを数えなさい。」つまり数え切れないほどの子孫がやがてアブラハムに与えられるのだから、あなたは心配する必要がない。そのような神の

語りかけです。

アブラハムは空を見上げ、改めて天に浮かぶ星の存在に圧倒されます。神がこの世界を造られた事実に思い至ります。この宇宙の中で自分の存在がいかにちっぽけなものであるか胸に迫ってくる。それと同時に、そんなちっぽけな自分に神が語りかけて下さっている。自分のことを覚えてくださり、心配してくださる神のあわれみに深い感動を覚えていきます。

「彼は主を信じた」とあります。神が子どもを与えて下さるのがわかったので安心した、というレベルではありません。神がどのようなお方であるのか目が開かれているのです。神は私たちの頭では考えることができないほどの大きな大きな聖いお方だ。その聖さの前に自分は、いかに汚れているか。いかに良くない思いをいだき、いかにそむき続けてきた者か。それなのに、こんな私を神がどれほどにあわれみ、心配して下さっていたのか。そのような主であることに目が開かれ、アブラハムは信じていくのです。

主はそれを彼の義と認められます。言い換えれば、彼は救いをいただいたということです。そういうことがあった後に、アブラハムは自分と一族の男子に割礼を受けさせていく、そういう順序になります。

3 何の働きのない者が

(1) 強くなければ救わないのか？

ローマ書に戻りまして、パウロはアブラハムのことを思い起こして、11節で「彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼を受けたのです」と、創世記の時間的な流れをきちんと確認します。割礼を受けたから救われたの

ではない、救われた後にしるしとして割札を受けたのですよ。そういう順番です。

さてではこの問題、私たちといったいどんな関係があるのか。もちろんパウロは割札のことだけを問題にしているではありません。割札という問題をとおして、救いとは何かを教えようとしている。神はどのようにして私たちに救いを与えて下さるのか。そのことを確認しようとしている。

救いというと、世の人たちは思っている。そしてかつて私たちも思っていた。人間という者は生まれながらに良いところもあれば欠点もある。だから教育によって人間を正しく育てなければならぬ。日本には道徳という素晴らしい伝統がある。道徳をきちんと教えることで人間は正しく生きられる。もちろん教育と言うことだけではなく、一人一人も自分の力で、自分の欠点や弱点を克服して、常に素晴らしい人間を目指し、努力すべきだ。そういう考えが根深くあります。私はかつてそう思っていました。ひとことで言えば、人間は自分の努力で自分を救わなければならない。そんな思想です。

もっとわかりやすい例で言えば、お賽銭というものがあります。人々は、神社に願いを叶えて下さるようにお参りに行きます。鐘をたたき、手を合わせる。目の前にお賽銭箱が置いてある。さていくら入れるか。十円でかなえてくれというのはちょっと安すぎるかな。百円でもちょっと。では今回は千円入れておこう。後から、願いがかなえられなかったことがわかると、後悔する。あのとき一万円札を入れておけば良かった。願いがかなえられるか否かは、お金の額によって左右され

る。どこかでそんなことを思っています。結局根っこにあるのは、人間の努力、人間の側の犠牲が大切だという考えです。

ユダヤ人も同じような考え方を持っていました。

(2) 弱いアブラハムでも

パウロはこのことを問題にしています。ユダヤ人の考え方に真っ向から反論します。あなたがたはどうしてまだそんな考え方を後生大事にしているのか。アブラハムはどのようにして救われたのか思い出さない。彼は、何か一生懸命努力をして救われたのか。お賽銭箱に自分の財産を全部投げ入れたから救われたのか。自分のからだを傷つけることによって、それで救われたのですか。全然違う。彼がしたことは、ただひとつ夜空を見上げて、そこに空を埋め尽くす満天の輝く星を見て、自分の子孫はこのようになると信じた。主が言われることを信じた。ただそれだけです。

アブラハムが義とされる、何か特別の資格があったのか。いいえ、ありません。彼は元々素晴らしい信仰者だったのか。いいえ、彼は自分のいのちが危ないと思ったら、自分の妻を妹だと偽って、外国の王さまに差し出すような卑怯な人間だったのです。それも一度だけではない。二度も繰り返してしまう。どこかに弱さを抱えていた人でした。アブラハムだって、私たちと全く変わらない一人の人間だった。悩む人だった。苦しむ人だった。自分勝手なことをして失敗する人だった。欠点だらけの人間なのです。

それなのに、なぜか神はアブラハムを選び、アブラハムに関わり続けて下さる。アブラハムは今から四千年ほど前の人だと言われて

います。私たちにしてみれば、まるで化石のような大昔の人に見えるかもしれない。しかしあのような欠点だらけの弱いアブラハムをあえて神は選び、神を信じる信仰を与えようと励まして下さる。

(3) であるなら私たちも

そうであるなら、私たちだって同じだということになります。私たちも、アブラハムと同じような道を歩んでいくのです。アブラハムが、何か努力をしたから救われたのではない、それと同じように私たちも、何かをして救われるのではない。そもそも私たちは何ができるのか。何かできると思っていたけれど、実は何もできない、何も差し出すものものない。

私たちができるのことはただ一つです。主は、この世界を造られた方であり、主はこの世界を御支配しておられる方である。そして私はあなたの前ではちっぽけな者に過ぎない。そのことを認めることではないでしょうか。

私たちは強いのでしょうか。強いと思っていただけて、本当は弱い自分に過ぎない。でも弱いなんて言うことはこの世で恥ずかしいことです。ですから必死で隠し続けて生きることになります。本当の自分ことはだれにも言いたありません。実は、自分は人に傷ついてしまう弱い人間なんだ。あるいは、何度も人を傷つけてしまうような恥ずかしい人間なんだ。誰だって幸せに生きていきたい、みんなと仲良くして平和に過ごしたい。みんなそう思っている。でも、どうしてもぎくしゃくしてしまう。どうしてもトラブルを起こしてしまう。それだけではない。からだが思うようにならない。からだか病んでいく。い

ろいろな弱さを抱え込んでしまっている。

結局の所、私たちは道に迷ってしまった羊のような状態です。道を捜したけれど見つからず、弱り果てた羊のような状態でさまよっている者です。

そうしたら私たちにできることは何ですか。「主よ、そんな私たちをあわれんでください。」そのように叫ぶしかない。それが私たちの本当の姿ではないですか。

4 「私たちがあわれんでください。」

マタイの福音書9章27節に、そのことの実例が示されています。あるとき、ふたりの盲人がイエスに叫びました。「ダビデの子よ。私たちがあわれんでください。」イエスはこう言います。「わたしにそんなことができるか。」盲人たちは答える。「そうです。主よ。」その告白を聞かれたイエスは彼らの目にさわって、「あなたがたの信仰のとおりになれ」と言われ、すると彼らの目が開かれていきます。

「主よ。私たちがあわれんでください。」そのように叫ぶ者の声を、主は決して聞き逃すことはありません。

主である方がどれほどに私たちがあわれんでいてくださっているのか、考えたいと思います。そのあわれみは誰ひとり例外なくすべての人に注がれています。私たちはそれを信じるのか、それとも拒み続けるのか。どちらか一つの選択がゆだねられています。

信じるとはなんのでしょうか。信仰とは何でしょうか。主を信じる信仰によって救われる。これが私たちの立つ土台であったはずです。しかしいつの間にか、行いによらなければ救われないかのような不安を覚えてしまう私たちでもあります。

だからこそ、何度も確認しなければなりません。私たちは、神の前ではあわれな罪人に過ぎない。本来、神のあわれみを受けることなどふさわしくない私たちでした。けれども神は、私たちが叫ぶのを待っておられる。「主よ。私たちがあわれんでください。」この叫び声に答えたいと待っておられる。それが私たちの主です。

私たちは手を開き、心を開き、この方のあわれみにすがりたいと思うのです。また信仰を新たにして、一歩踏み出していきたいと願われます。